

## 私の履歴書 ～出会いの歴史～

クレア経済アドバイザー 小笠原正広

### 【初めての海外勤務と東南アジアとの出会い】

1976年8月、「空の貴婦人」と親しまれ尾翼に鶴丸を付けた JALDC-8 は、羽田国際空港を飛び立ち、初めての海外赴任地であるクアラルンプール (KL) スパン国際空港に舞い降りた。私はタラップを降りると、南方特有のスコールの後の湿気を含んだ熱気に噎せ返った。空港の税関を通り、ガラス張りの扉の一步外に出るとそこは屋根はあるが外気を隔てるものではなく石畳の空間。椰子油の臭いと今迄経験した事のない臭気（この臭いこそが“ドリアン”の臭いである）に襲われた。これが私の生まれて初めての海外赴任であり初めての海外への旅である。入社6年目の海外雄飛であったが、希望と不安の出発でもあった。勿論この時、この DC-8 が後に大きなショックをもたらすなどと、少しも考えていなかった。

### 【柔道との出会い&佐賀大学闘争】

柔道との出会いは、小学校低学年の時である。中学生になり、喧嘩に強くなりたくて、積極的に道場へ通った。中学3年で初段を取った。大学で柔道を再び始め、卒業までに2段を取った。柔道部キャプテンとして、対抗試合では大将を務めた。得意技は送り足払い（俗称“ツバメ返し”である）。この技が決まると相手は頭から落ちる。卒業と同時に3段を授与された。佐賀大学では勉強は余りしていなかった。講義にも殆ど出なかったというよりも“休講”やバリケードで教室に入れなかった。全学連、核マル、社青同、と言われる各団体が、学生食堂の二階にある自治会室に陣取り拡声器で何かをがなり立てている。この時代“大学闘争”が全国に吹き荒れていた。

### 【野村貿易との出会い】

やがて就職の時期。ゼミの教授は「君は銀行マンには向かない。中堅商社がよいだろう」と野村貿易を紹介してくれた。“商社”とはどんなところが全く知らなかったが、“野村貿易”を受験した。最終面接では学生時代の不勉強を指摘され、「企業は給与を支払って教える所ではない。人に投資を行いそのリターンを享受する組織である」と大目玉を戴いた。この面接で野村貿易には縁がなくなると諦めたが、念のため電話で合否問い合わせたところ「採用する事になったからもう一度面接に来い」と言う。狐につままれたような気分で、企業社会の不可解な論理を初めて実感した。この野村貿易に41年間お世話になった。

### 【KLでの駐在員時代の出会い】

KLは当時人口80万人。マレーシア最大の都市でKL支店は支店長と新米駐在員の私を含め総勢9名。片言の英語と、マレー語は先輩から“米はナシ”“魚はイカン”“菓子はクエ”と言った調子で教わった単語を並べるだけの頼りない駐在員であった。当地では主に“パーム油”天然ゴム、化学品を担当し世界中のバイヤーやブローカーを相手に売買を行う商社マンとしての充実感と、5分毎に変わるパーム油相場で眠れない夜を数多く経験した。相場取引の怖さを身に沁みて



KL店スタッフ、中央近藤支店長  
左から3人目小笠原氏 右から2人目長期出張中の前田氏

実感した時代であった。そして 1977 年 9 月 27 日。スパン空港は激しいスコールに見舞われていた。JAL715 便はなかなか着陸出来なかった。私は日本からのパーム油輸入協議会視察団の出迎えの為空港で待機していたが、突然機体がレーダーから消え、近くのゴム園に墜落する事故が発生。乗客乗員 79 名中 34 名が死亡、45 名が重軽傷を負う大事故になった。駐在員は大使館と共に事故の後処理、日本からの犠牲者家族の受入準備で大変な騒ぎとなった。その翌日、日航機 DC-8 はダッカでハイジャックされた。私の“空の貴婦人”は“呪われた貴婦人”となってしまった。

### 【インドネシアの時代-矛盾を抱える経済大国-と石炭との出会い】

1981 年に KL から帰国。金属本部の鋳産品部に配属され石炭開発を担当。豪州の石炭開発を手始めに世界各国に足を向けた。そんな中インドネシアにも石炭が在るので一緒に開発をやらないかとある大手財閥より声が掛かった。提携先の石炭技術者と共にボルネオ島のサマリンドの原野で開発を手がけた。ジャングルにテントを張り更にその中に“蚊帳”を張った。グリーンスネークやコブラ等の毒蛇から身を守らなければならなかった。1981 年に開発を開始、1984 年 11 月に日本向け船積を初めて実行した。そして 1998 年 5 月インドネシアでは、近代化に目覚めた国民が蜂起して、主要都市は一夜にして火の海と化した。この瞬間 32 年間続いたスハルト独裁体制は終焉を迎える。これが世界を震撼させたインドネシア暴動である。その後、インドネシアは民主化へと大きく舵を切り大統領就任 9 年を迎えたユドヨノ政権のもと四輪の生産は昨年 100 万台を突破、一人当たりの GDP も 3,512 ドルとなり、中間層と言われる人達は全人口の半数以上の 130 百万人に達すると言う。人口構成は他国に例を見ないピラミット型の人口ボーナスの享受が約束されている。私はインドネシア暴動勃発前後 2 回の混乱期にジャガタに駐在した。

今迄になく繁栄の道を歩むインドネシア経済だが、やはり貧富の格差は半端ではない。今でもゴミの山に埋まり、1 日の食にもこと欠き、まともな教育すら受けられない子供たちは数多くいる。昨年ジャガタに住む友人から届いた手紙に、彼らが東日本大震災の被害に苦しむ日本をどこからか聞きつけ、お見舞いの気持ちを込めた寄せ書きを届けてくれたと伝えてきた。この貧しいが素朴で優しいそして越えられない“経済格差”という矛盾を併せ持つ“経済大国”。これがインドネシアである。

### 【新しい出会いへ】

この歳に至る半世紀超、数多くの出会いがあった。夫々の国の人々から学び、教えられ、またビジネスを通じて“喜怒哀楽”に出会った。そして今“クレア”と言う新しい出会いが始まった。人生“一期一会”。これからどんな出会いがあるのだろうか楽しみである。



交流支援部 経済交流課 経済アドバイザー おがさわら まさひろ 小笠原 正広

1947 年（昭和 22 年）大分県生まれ。1970 年佐賀大学卒業後野村貿易（株）入社。マレーシア（クアラルンプール支店）、インドネシア（ジャガタ事務所）勤務、その後（2000 年～）インドネシア地域総支配人兼現地法人社長を経て、東京本社業務統括部長、繊維・資材部門長、食品部門長、常勤監査役を勤め、2011 年 6 月同社退職。2013 年 4 月クレア経済アドバイザーとして勤務。千葉県在住。